

撰津豊川村南塚古墳調査概報

川 端 眞 治
金 関 恕

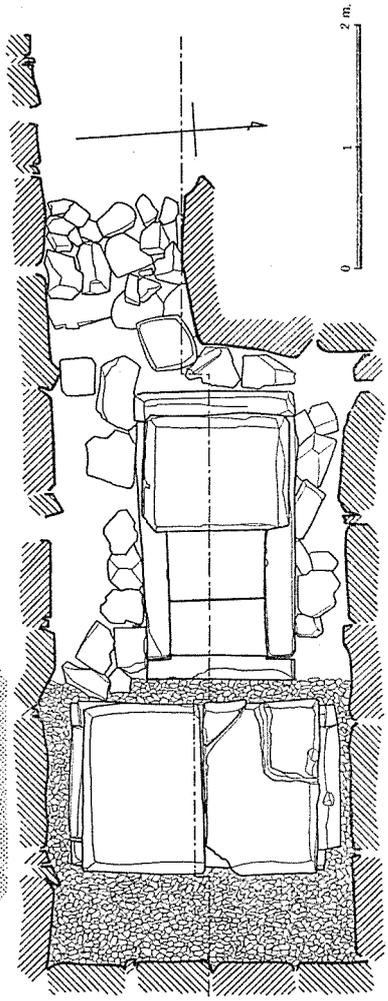
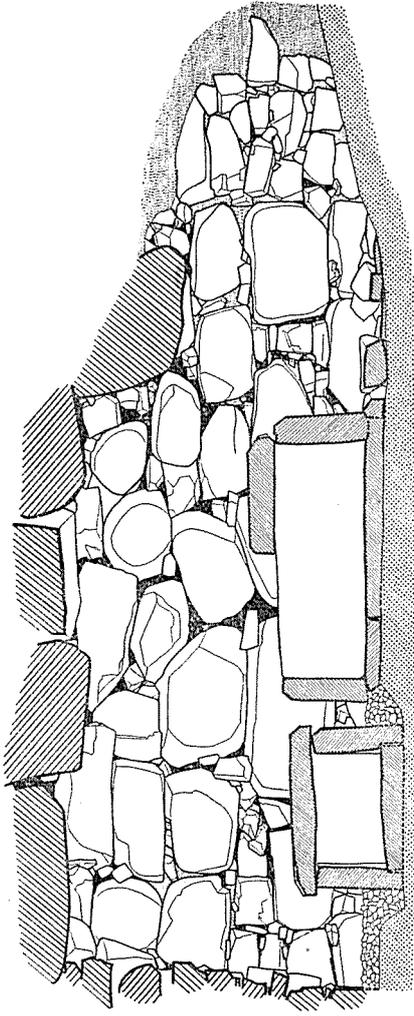
昭和二十九年十一月下旬、大阪府三島郡豊川村宿久庄の大府警
察病院茨木分院構内で、病棟増築の工事の際に、横穴式石室を主体
とする一基の古墳が破壊されることになった。大阪府社会教育課の
委嘱を受けた京都大学考古学教室では、小林講師指導の下に教室員
の協力を得て、十二月一日より二週間を費して調査を行つた。その
結果、この横穴式石室内には形式を異にする二基の石棺がおかれて
おり、土器・馬具・武器・装身具等夥しい数の副葬品が残存してい
ることが判明し、横穴式石室墳研究の上に好個な資料を提供した。
以下この調査の概要を記したい。

淀川の北岸、山崎より伊丹にかけての沖積平野を、山麓よりに東
西に走る旧西国街道の一带は、かの継体陵・今城塚等の教基の大規
模な前方後円墳をはじめとし、塚原古墳群・阿武山古墳等の古墳時
代後期に至る一連の古墳を有し、畿内古墳の地域的性格を考ふる上
に、一つの重要な分布圏をなしている。ことに宿久庄の地には、昭和
二十年春京都大学によつて調査され、玉葬鏡をはじめとする十数面
の鏡や、碧玉製装身具等重要な遺品を出した紫金山古墳、およびこ

れに接して青松寮古墳があり、又大正五年に船載鏡・馬具等を出し
た、横穴式石室を内部主体として前方後円の墳丘を有する、隣村福
井村の海北塚もこれらと近い。本古墳もこれらと同じく山丘の南麓
に営まれたものである。

本古墳の封土は、過去にかなり変形されていたのでその原状を詳
かにしないが、採土工事着手前に作られた地形図によれば、南北に
約五十米の長軸をもつ、ほぼ南向きの前方後円墳であつたと推定さ
れる。後円部の径は約三〇米、墳丘の高さは後円部で五米、前方部
で三米を測るが、後者は原状とはなし難い。古墳の立地する山丘が
南に裾をひいているために、盛土の厚さは南北両端でかなりの差を
生じているが、後円部の盛土は約四米ある。前方部にあたる部分は、
墳丘が著しい変形を蒙つているが、中段の円筒列を形成すると推定
される埴輪円筒列の検出によつて、単なる円墳ではなかつたことが
考えられたのである。なお前方部では、この円筒列よりやや上方に、
高さ約一・三米、腹径約一米の須恵器の大甕が埋置されているのを
見出した。

この古墳の主体をなす横穴式石室は、後円部中央付近で墳丘の長
軸とはほぼ直角に位置し、西に向つて開口するもので、地山を若干削
つた面に基底をおいて築かれている。玄室は、長さ六・四米、幅
二・五米の長方形のプランを有し、高さは奥壁の所で約二・五米あ



る。奥壁、両側壁とも花崗岩を含む二、三種の岩石を積んで構築され、せり出しは殆んど認められない。上部には四枚の天井石が架されている。羨道は、女室南壁の延長面を南壁として、片袖式につくられている。入口の部分は採土工事によつて破壊されてしまったため、長さ約二・六米を残すにすぎないが、工事従事者の話から判断すると、除かれた部分は、さほど多くなかつたようである。幅は一・二米、高さは女室入口の所で一・六米ある。羨道と女室の境部においては、九〇糎の範囲にわたつて、石室閉塞のためにおかれたと考えられる塊石積が基部だけを残している。これ等の両側で、側壁を構成する大石を境として、羨道側では側壁が女室のそれとは異つた、かなり小さな石積となつている。羨道入口部の天井石は、女室入口に接して架された一枚より残つていない。なお床面は、羨道から女室奥壁にかけてゆるやかな傾斜で下つている。

さて女室内には、俗に松香石と呼ばれる凝灰岩製の組合式石棺が、ほぼ床いっぱいに据えられている。前棺は、地山の上に直接石室の主軸と方向を等しくして配置され、奥棺は、奥壁との間約七五糎を距てた場所に、縦は石室の幅いっぱいに、横は棺の幅の範囲に、地山を二〇糎ほど掘り下げて石室の主軸と直角におかれている。奥棺の構造は、まず二枚継の底石をすえ、その外側に、二枚継の東側石と一枚石よりなる西側石をたて、東西両長側石の間に南北両短側石

をはめこんでいる。このうち西側石のみに繩掛突起が造り出されている。蓋石もまた二枚継で、蒲鉾形をなさず、断面は矩形に近い。

棺内北部には、同じく凝灰岩製の直方形の石枕が遺存し、この上面には東に偏つて弧状の刳込みがある。棺身の内側には一面に酸化鉄の朱が塗られていた。棺の内法は、長さ一・八五米、幅九五糎、高さ五四糎。前棺の構造は、二枚継の底石の上に一枚石よりなる長側石をたて、短側の石が長側の石の外側にたてられている点で前者と異なる。両長側石はいずれも繩掛突起を有しない。蓋石は二枚継で、上面縁に面取が施されているが、東半の蓋石は失われていた。棺内側には水銀朱が一面に塗られている。内法は、長さ一・〇九米、幅八〇糎、高さ七一糎。なお奥棺の側石は、石室壁との間に小砂利を厚くつめて固定しているが、前棺は、周囲に塊石を配置して側石を支えている。

遺物は、両棺ともに殆んど完全な盜掘攪乱に遭つている。しかし棺外副葬品は、女室入口附近のものを除くほかはかなりよく遺つていた。特に奥棺と奥壁との間にある幅七五糎の空間には、多数の土器・馬具・鉄鏃類が原状のまま遺存していた。次にその概要を表示する。

棺内

奥棺 水晶切子玉・ガラス小玉・ガラス丸玉・金銅製品破片

前棺 ガラス小玉・金銅製飾金具

棺外

奥棺與壁間 馬具(轡・杏葉・雲珠・鞍金具・鐙・革帶金具)

須恵器(器台・壺・高杯・蓋杯・碗・提瓶)

土師高杯・鉄鍬・鉄矛・石突

前棺南側 馬鈴・衝角附冑・須恵器

前棺北側 挂甲・馬具(金銅製革帶金具・杏葉)・三輪玉・

鉄鍬・須恵器

前棺與壁間 金銅製沓破片・須恵器

前棺前壁間 鉄矛・須恵器

羨道 革帶金具・須恵器

棺内の遺物はここに流入堆積した土砂中に含まれていたもので、もとより原位置は知り得ない。原状を保っていた奥壁與棺間では、砂利層の上に先ず鉄鍬をおき、その上に馬具、土器の順に重ねられている。鍬は五〇本以上を切尖を揃えて一束とし、方向は各束ごとに異なるが、ほぼ南北に向けられている。

これらはすべて長さ二〇釐程度の尖根式と呼ばれる形式のものであるが、各束には一、二本つつ薙刀状の切尖をもつた鍬が混えられていることが注意される。束は二〇群にも達するから、鍬の総数は千本を超えるであろう。馬具は、すくなくとも轡・杏葉などをセツ

トとする三組が、南と北と中央とにおかれていたことが知られる。

この中、北部のものは鏡板・杏葉が鐘形、南部のは心葉形で、ともに鏡板と杏葉とが同形品であるが、中央のはS字形鏡板と扁円劍尾形杏葉とを一組としている。鞍は南と北とにのみあり、輪鐙は北に一個だけあつて、各馬具群が完全なセットとして副葬されたものではないことを物語っている。馬具の上に置かれた土器群は剝離した壁石の落下のため甚しく破碎していたが、現場での復原によつて、ほぼその原位置を推すことができた。それによると、およそ中央に相對して二つの器台をおき、これより奥壁寄り北側には裝飾附台附壺、南側には器台をおき、各器台の上には壺を載せている。裝飾附台附壺は肩に男女人物・馬・犬・鹿等の動物がめぐっている甚だ面白いものである(六八頁図参照)。器台の近くには蓋杯が、いずれも杯の下に蓋を裏返しに重ねて二組、つつ三重ねあり、その中の二には、更に杯のみが重ねられていた。ところでこの蓋杯は、器台その他の土器が鉄鍬や馬具の上にあるのとは異つて、直接砂利に接しておかれている。前棺の周囲から見出された挂甲・冑・金銅製沓破片のうち、甲の一部および冑は遺存状態がやや良好であるが、出土状態から見て、これらは元來棺内におさめられていたものが、盜掘の際、棺外に遺棄されたのではないかと想像される。

次に、今まで述べて来た石室内の状態について二、三考えられる

点を記したい。

まず注意されるのは、この玄室内におかれた二つの石棺がそれぞれ異つた系統に属することである。即ち、奥棺は、一枚石よりなる西側石の両端に纏掛突起を有すること、長側の側石が短側のものの外側にたてられていることから、長持型石棺の構造を伝えたものと認められる。尤もこの東側石は突起を有せず底石蓋石も共に二枚継ぎであり、蓋石が蒲鉾形をなさず、その断面が短形に近い点、更に棺材として通常家形石棺の時期になつてはじめて使用される松香石質礫灰石を用いていること等から、これがこの種の石棺の最も新しい例であることが知られる。これに対し、前棺は、短側の側石が長側のものの外側にたてられていること、蓋石の上面縁に面取りを施す手法は、これが明かに家形石棺の系列に入れられるべきことを示している。しかも所謂屋根根型の蓋をもち四辺に大きな纏掛突起を附した類とは異つたタイプに属していることは、家形石棺の系統を考える上に興味ある資料を提供するであらう。

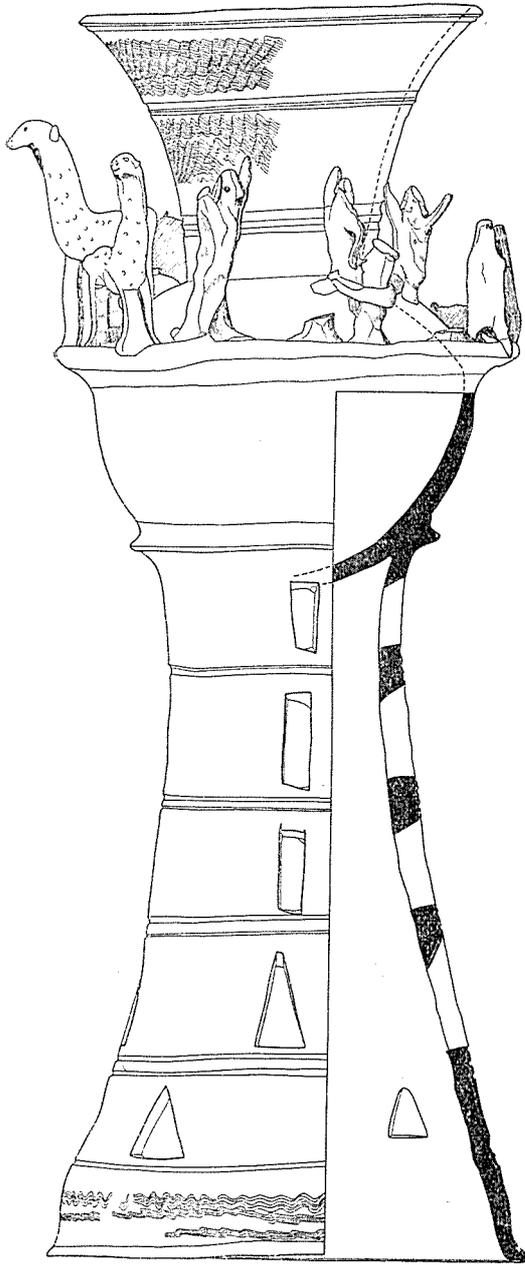
これらの形式の差、或いは両棺の内部に塗られた赤色顔料の種類の違い、更に上述したような両棺の設置の状態の異つた点から、二者の埋葬の時期が同時でなかつたことは充分察知できる。なお想像すれば、第一次埋葬時に玄室の床全面に敷かれていた砂利が、前棺を搬入した際に整理され、此度は石室の開口にあたつて取り除かれ

た羨道の詰石が、棺の固めとして使用されたとも説明づけられるであらう。かく時期を異にした二面の埋葬が行われたと考えられるゆえ、第二次葬の時、この石室の入口部に多少の変形が加えられた結果、羨道部の壁の石積と玄室の壁のそれとが相違することとなつたのではあるまいか。ともかく古墳時代中期に盛行した長持型という古い棺形式につながるものと、横穴式石室という新しい墓制とほぼ同時に採用された組合式家形石棺とが、若干の年月を隔てて同一墳墓に収められたことは、墓制の変革期に生じた現象として注目すべき事実である。又此処から十里余を距つた河内二上山に産する松香石質礫灰岩が、淀川を越えて此の地に運ばれたことも、当時の運搬技術等について興味ある問題を提示するであらう。

更に、この古墳の棺外副葬品を考える上に問題となることは、二棺の埋葬が時期を異にすると考えられる以上、各遺物がいずれの埋葬に伴うかという判別である。奥の遺物が第一次の、前棺の周囲のものが第二次の副葬品とするのは一応常識的な解釈のようであるが、横穴式石室の遺物は殆んど床の四周に及ぶのが普通であるから、前棺附近の遺物に第一次葬品が混つてもよいわけである。しかし又、第二次埋葬に際して前次の遺物が整理され、新しい副葬品と置換えられることも考えられる。更にその整理が部分的なものか、全部に及ぶものかも問題である。このような意味において、坏と器台群と

の埋葬位置の差異は、石室前半部にあつた後者のグループが、前棺搬入に際して奥にまとめられたという推定も成立つてあろう。いずれにしても、おかれていた位置からだけでは決定的な結論を得られ

ないことではあり、又土器の形式の上にもそれ程明確な差が認められない以上、今後の調査において究明されねばならぬ問題となるであらう。



縮尺 約 $\frac{1}{3}$
 (原口正三氏原圖)